

アートによるまちづくりが地域住民に与えた影響

～直島(香川県香川郡直島町)を対象として～

1160460 橋本 京香

高知工科大学 マネジメント学部

1. はじめに

1.1 概要

本研究では、香川県香川郡直島町の「直島」を対象として、アートの島として観光地化した直島に住む高齢者の福祉や生活の質に注目し、アートプロジェクトが地域住民に与えた影響を明らかにした。アートプロジェクトを実施したことにより、地域への愛着や子供の社会性が高まり、新たな趣味から出会いが生まれ、生きがいを持つようになるなど、地域に好影響を与えている。

しかし、観光客の急激な増加により、環境破壊や日常生活への悪影響もみられた。その対策として、高齢者をさらに地域に関わらせる、高齢者主催のブースやアート展示を行う、旬の食材や特産物を使った食事を提供する食堂を運営する女性チームを作るなどの取り組みを通して、地域住民とアートプロジェクトのより良い関係性を構築していくことが求められる。

1.2 背景

近年、中山間部や離島など地方において過疎化・高齢化が進行し、地域間格差は深刻な社会問題のひとつとなっている。そこで、政府・自治体では定住支援などの政策を展開しているが、地方から都市への人の流出が止まらないのが現状である。その中で、地域再生の手段として日本中にアートプロジェクトによる地域活性化やまちづくりに注目が集まっている。アートプロジェクトとは、アートを媒介に地域を活性化させようとする取り組みであり、アーティスト、地域住民、地域外からのボランティアの協力によって実施され、多くの若者を呼び寄せる効果がある。これにより、観光地としての新たな魅力が高まり、観光客が増加することで宿泊業など観光産業が活性化し、地域経済にとってプラスになるだけでなく、

地域住民にとっても来訪者との交流や地域貢献が高齢者自身の福祉や生活の質にプラスに働くのではと期待されている。

1.3 目的

アートの島として注目され、観光地化した直島の地域住民の生活や自然環境に着目し、芸術祭が地域住民にもたらした変化を明らかにする。ヒアリング結果より、島を舞台としたアートプロジェクトについて、今後の課題と対策を提案する。

1.4 研究方法

本研究は、はじめにアートプロジェクトがもたらす地域への様々な影響について事例研究を通じて考察する。次に、瀬戸内国際芸術祭の舞台である直島の地域住民に対し、ヒアリング調査を行い、地域住民にとってのアートプロジェクトの位置づけを明らかにする。最後に地域・環境・観光の側面からアートプロジェクトの課題を抽出し、地域住民にとってアートプロジェクトとのより良い共生方法について提案する。

2.1 直島の概要

香川県高松市の北約 13 km、岡山県玉野市の南約 3 kmに位置する直島は、面積 8.13 km²、周囲 16 km、人口 3135 人(2015 年 4 月 1 日現在)の瀬戸内海に浮かぶ小さな島である。船の発着を擁する宮ノ浦、戦国時代の城下町を原形とする本村、古くからの漁港である積浦の 3 つの集落から成り、北部の産業エリア、中部の生活・教育エリア、南部のリゾートエリアに分かれている。三菱マテリアル関連、ハマチや海苔の養殖産業を主な産業としている。



図 1 香川県香川郡直島町の地図

(<http://naoshima.is-web.net/> : 最終閲覧日 2016/02/15)

2.2 直島の現状

ベネッセアートサイト直島による地中美術館やベネッセハウス、家プロジェクトなどの芸術的要素、本村地区の町並みなどの歴史的要素、女文楽などの文化的要素、直島エコタウン事業のもと、三菱マテリアル直島製錬所によって豊島産業廃棄物を処理する中間処理施設が設置されたことによる環境的要素など、直島は様々な要素からなる特有の地域資源に恵まれ、近年、「芸術・文化の島」、「環境の島」として、海外からも注目を浴びている。

また、直島の観光客入込客数は2004年の地中美術館開館以降急激に増加し、約40万人(平成23年)を記録した。観光客の約7割が女性であり、年齢別に見ると7割が10～30代、特に20代が4割を占めることから、若い女性観光客からの人気伺える。そして、2010年の記録によると外国人観光客はアメリカが最も多く、次に韓国、フランスと続いている。米国の観光ガイドなど海外雑誌に取り上げられるほど世界中からアートの島として人気が高く、外国人観光客の間でブームになっているようだ。

しかし、直島の人口推移は1960年代の人口約7800人の全盛期から徐々に高齢化と人口減少により島の過疎化が進み、2015年の人口は約3200人弱まで減少している。町の人口の半分以上は女性、高齢化率が約34%で3人に1人は高齢者という現状である。

1970年	6,007人
1975年	5,643人
1980年	5,302人
1985年	5,034人
1990年	4,671人
1995年	4,162人
2000年	3,705人
2005年	3,538人
2010年	3,325人

図 2 直島町の人口の推移 総務省統計局 国勢調査

2.3 直島とアートの歴史

直島のアートによるまちづくりの出発点は、直島の三宅元町長と岡山市に本社を構える福武書店(現株式会社ベネッセホールディングス)の福武社長、世界的に著名な建築家・安藤忠雄氏の絶妙な人脈と熱意からだった。

1989年、ベネッセアートサイト直島が活動をはじめ、2004年には「地中美術館」を開館した。

それ以降、のれんプロジェクトやコメづくりプロジェクトなど島人を巻き込んだ活動も始まった。2009年には直島銭湯「I♥湯」の運営を直島町観光協会へ委託するなど、空き家を活用したプロジェクトも開始した。長い年月をかけ、直島という風景のなかにアートを溶け込ませ、住民が現代アートを軸として、歴史や文化、あるいは自分たちの生きているコミュニティそのものへの関心を深め、心を開き楽しみながら主体的に来訪客を受け入れだしたのである。

2.4 瀬戸内国際芸術祭の概要

瀬戸内国際芸術祭とは、瀬戸内海の島々を舞台に開催される現代美術の国際芸術祭である。3年ごとに開催され、第1回は2010年、第2回2013年、第3回は今年2016年開催予定である。芸術祭開催年以外においても1年を通じた誘客・発信のための活動に取り組んでいる。芸術祭の来場客数は、第1回105日間の開催では、当初予想の30万人の3倍を超える93万8246人を記録した。そのうち、会場別の入場者数はモネの作品を収めた地中美術館や芸術家の草間彌生の作品などが人気の直島が29万1728人で最多を記録した。第2回108日間の開催では、前回の会場に沙弥島、本島、高見島、粟島、伊吹島の5島と宇野港周辺が加わり、来場者数は約107万人に達した。この香川県における経済波及効果は132億円にもなる。



図 3 直島のシンボル 草間彌生作

3. 直島を対象とした調査

3.1 ヒアリング調査

(1) 目的：芸術祭開催に伴い、直島の地域住民の生活や意識、自然環境、島の観光事業にどのような影響があったかを明らかにする。そして、今後も開催される芸術祭と地域住民の関係性について課題を抽出する。

(2) 日時：2015年11月4日(水)/2015年12月16日(水)/2016年1月28日(木)

(3) 場所：直島町役場、宮浦港、ベネッセハウス周辺

(4) 対象：島で出会った地域住民の男女13名

〈30代女性1人、60代女性3人、70代女性4人、60代男性2人、70代男性3名〉

(5) 主な項目：

①直島に作品が設置されるようになって生活や島の自然環境にどのような影響があったか

②アートの島へと変わっていった直島への魅力や愛着の感じ方に変化について

③今後あなたは観光業にどのように関わっていきたいか？

④このまま直島が観光地としてあり続けることについてどのように考えるか？

3.2 ヒアリング調査結果

(1) 観光産業による島への利益

観光産業には女性、中高齢者が多く従事し、その過半数が香川県出身者である。しかし、32.5%が他の地域から移住しており、移住者が直島の観光産業に重要な役割を果たしているといえる。観光産業による島への利益として、移住者の増加や地域産品のブランド化などが挙げられる。

(2) アートに対する若者と高齢者のギャップ

住民にヒアリングを進めていく中で、現代アートは高齢者には理解が難しいという意見が多々あった。直島は島全体がアートとはいっても、産業エリアなど一部のエリアには立ち入り禁止区域が存在する。住民の多くは中部エリアで生活しており、地中美術館やベネッセミュージアムがある南部のアート作品が多く設置されている区域に住民が立ち寄ることはほぼなく、若者がアートプロジェクトへの関心を寄せる一方で、なぜ直島にこんなに多くの観光客がやってくるのか、不思議に感じている住民は多い。

(3) 観光客と住民の関係

観光地化したことによる不利益として、観光者のマナーに関するものが多く、「治安の悪化」や、自転車のスピード違反などの「交通環境の悪化」や「ゴミが増加した」ことなどが問題視されている。しかし、観光協会や主催者の努力により迅速な対応があったことも分かった。外国人観光客への通訳のために英語を勉強したという住民や、地元の小学校では観光客へのガイドが授業に取り入れられていた。住民は観光客が増えることを喜び、歓迎するムードがあった。島を訪れた観光客の多くが島の魅力のひとつとして住民のあたたかさを挙げ、住民とのふれあいが直島にまた来たいという思いやリピーター観光客の増加につながっている。

(4) 芸術祭関係者と住民のコミュニケーション

アートプロジェクトによるまちづくりにおいて、芸術祭関係者や住民のコミュニケーションが不可欠の条件であり、大切なのはこのコミュニケーションを持続することだ。以下はそのために必要であると考えられる4つのポイントをまとめたものである。

①企業からの歩みより

②行政が間に入って調整する仕組みづくり

③アーティスト(アート)からの歩みより

④地域のスピードに応じた取り組み

直島の場合、町議会議員を身近な存在にすることで、直接意見を言いやすい環境を整え、住民との関係性を十分な説明と時間をかけ、ゆっくりと深めていったことが重要であったと考える。

(5) 直島の魅力と愛着

生まれてからずっと直島で生活をしているという漁師の男

性や数十年前に島に嫁入りした女性、数年前に移住してきた若者など、島に関わっている年数が異なる分、島への魅力の感じ方や愛着は人それぞれである。芸術祭に参加している住民は飲食店や宿泊施設を運営するなど、自然豊かな島の資源を最大限に活かし、直島の魅力を多くの人に伝えようとしている。

一方で、家が直島にあるから住んでいるだけ、お金があるなら市内に引っ越しをしたいという住民や、観光産業には一切関わっていない住民も多かった。昔の人は島愛が強く、よそ者への反抗心が強かったが、今は世代が変わり、移住者へ厳しくいう人は少なくなったという。また、直島は自分が知っている昔の姿から随分変わってしまったと語り、今と昔の住民の島への思いも変化していることを感じた。

(6) 観光業に対する住民間の意識の違い

「もっと世界に直島の良さを伝えたい。」という前向きな意見がある一方で、「次々と新しい建物が設計され、空き家が利用されようとしている。」「今は島に人気があるからいいものの、今後どうなるのだろう。」という将来を心配する声もあった。今後も観光業に関わりたい人、そうでない人、肯定的な意見と否定的な意見の両方をうかがうことができた。

3.3 ヒアリング調査まとめ

集団としては、環境保全や直島住民としての強い意識、観光産業への前向きな取り組みや、おもてなしの心が見られた。一方で、個人に目を向けると日常生活への支障や今後も開催される芸術祭を不安視する者も多い。島の活性化を目的として始まった芸術祭は、いつのまにか住民を取り残したまま進んでしまっているように感じた。以下はアートによるまちづくりが地域住民に与えた影響を、意識・環境・観光の3つの側面について集団と個人の視点に分け、まとめた図である。

	集団	個人
意識	世界に直島の魅力を伝えよう！ 観光客の増加を喜び、歓迎するムード アートだけでなく直島の文化も知ってもらおう！ 島への愛着、誇りが強まる	日常に刺激⇔普通の生活がしたい アートの良さが分からない・難しい 観光客の多さに疑問・いつまで続くの？ 住民の生活が最重視されるべき
環境	観光客増加に伴い、ゴミの排出量増加 「環境の島」清掃活動広めよう 道にゴミひとつも落ちていない努力 若者・移住者大歓迎 治安の悪化	繁盛期、フェリーやバスに乗れない住民が出てしまう 交通環境悪化(特に自転車のマナー) 交通(フェリー・バス)の便の増加、インフラの整備⇒生活が豊かで便利になった 観光産業に関わっていない住民多い(強制はしていない)
観光	経済効果、知名度アップ 地元の小学校ではアートの紹介をする 授業を取り入れる、子どもの社会性を 育む トイレボランティア	観光業・新しい仕事に就く 来訪者とのふれあいを楽しむ 外国人観光客への案内のため英語を勉強するなど、新たな趣味や生きがい 数年後、数十年後の直島の将来を不安

4. 対策と提案

4.1 地域住民の視点から見たアートプロジェクトの問題とその対策

本研究を進めていく中で、アートによるまちづくりが地域住民に与えた影響の中から4つの問題点を上げ、その対策について考察する。

① 瀬戸内国際芸術祭が地域住民のための祭りになっていない

今年も開催される芸術祭では、現代アートの建築物や空き家を利用した飲食店などが新たに作られている。次々と島に出現するアートに住民は戸惑っているようだった。芸術祭に反対ではないものの、住民にとって芸術祭には不安要素が残っている。

対策として、島の経済発展よりも住民の生活を最重視し、島の時間の流れにあった取り組みを行うことが重要である。具体的には、新しく生み出すばかりではなく、リニューアルや、観光客向けの飲食店を住民が利用しやすい店にするなど、住民にも芸術祭が喜ばしいものになるよう工夫をしなければならない。

② 地域住民の観光産業への参加が固定化している

ヒアリングを行っている、島外・県外からのアルバイトやボランティアのほうが多く、観光産業に参加している住民は固定しているようだった。参加は強制するものではないが、島の祭りを一緒に楽しんでもらうために、「参加」という形の前の段階として、多様な「関わり」をつくることから始める必要がある。住民の興味や関心

のあることを引き出し、高齢者でも無理なく参加できるようグループを作り、自然に関わりを深めていくことが求められる。

③ 観光客の急激な増加による住民の日常生活への支障

観光客の増加により、外国人観光客の大きな声や、車の騒音や自転車の交通マナーの悪化などが住民を困らせる要因となっている。

観光客と住民がストレスなく共存できるよう観光客のアート鑑賞マナー向上への取り組みを強化し、常に住民の声が行政に行き届くような良好な関係性を築くことが大切である。

④ 直島の持続的発展への不安

直島は経済的発展を遂げているが、まだ人口流出は続いている。直島の持続的な発展のために、地域づくりのリーダーの育成を急ぐ必要がある。島の将来を担う子どもたちをリーダーに育てるため、観光産業に関する教育や島内の雇用創出に力を入れるべきである。

4.2 地域住民にとってアートプロジェクトとのより良い共生方法の提案

今後開催される芸術祭のため、ここでは、瀬戸内国際芸術祭が島の住民を取り残したまま進んでしまっていることを問題点とし、その解決策として直島の地域住民、特に女性高齢者とアートプロジェクトとのより良い共生方法を提案する。

提案①高齢者をさらに地域に関わらせる

ヒアリング結果より、芸術祭への興味や参加意欲が低いことが分かった。アート作家との共同イベント、道案内ボランティアへの参加を促し、芸術祭に参加せず、傍観していた住民に役割を与えることで改めて島の一員だということを自覚させる。

提案②高齢者主催のブースやアート展示を行う

直島の伝統文化である女文楽を体験できるブースを作り、観光客と住民のふれあいの場とする。また、島の風景や島人をテーマとした写真展を行い、審査員は住民が務める。その写真を使ったアート展示を行うことで、住民と協力して作り上げるアートの楽しさや、アートを介したふれあいを体感してもらう。

提案③旬の食材や特産物を使った食事を提供する食堂を営営する女性チームを作る

先行事例として高知県四万十の十和おかみさん市を挙げる。おかみさん市は四万十町十和地区の生産者が集まってできた株式会社である。活動している方の8割は女性である。十和で収穫される新鮮な農産物、それらを使って作られる料理や加工品がおかみさん市の目玉である。

直島で採れた野菜や、新鮮な魚介を使った料理を観光客に振る舞うことで、おもてなしすることの喜びや、改めて島への愛着を感じることができると考える。

5. まとめ

アートプロジェクトを実施したことによる直島への影響として、以下の3点があげられる。

1. 地域住民の意識の変化
2. 地域環境の変化
3. 観光に与えた影響

しかし、アートプロジェクトの課題として、以下のことが示された。

- ・瀬戸内国際芸術祭が地域住民のための祭りにはなっていない

- ・地域住民の観光産業への参加が固定化している
- ・観光客の急激な増加による住民の日常生活への支障
- ・直島の持続的発展への不安

地域活性化の取り組みは、地域の存続なくして成立しえない。よって、アートプロジェクトと地域がより密接な関係性を構築することが今後のアートプロジェクトを進めていくうえで重要である。このためには今後の直島を考慮すると、高齢者の参加が不可欠であると考えられる。例えば、

- ・高齢者をさらに地域に関わらせる
- ・高齢者主催のブースやアート展示を行う
- ・旬の食材や特産物を使った食事を提供する食堂を営営する女性チームを作る

などの取り組みにより、高齢者が参加できるアートプロジェクトが今後望まれるのではないと思われる。

6. 参考文献・引用文献

アート・ツーリズムにもとづく発展の可能性と課題 - 直島の事例から(フंक・カロリン・大塚 寛子・張 楠)

「アートによる地域活性化～新たな地域経済創出への方法論として～」

芸術と文化を活かした街づくり瀬戸内・高松視察研修報告書
「瀬戸内国際芸術祭 2013」に伴う経済波及効果
現代アートがもたらした島の誇りとアイデンティティー

7. 付録

実施したヒアリング調査と質問項目・内容

(1) 目的：芸術祭開催に伴い、直島の地域住民の生活や意識、自然環境、島の観光事業にどのような影響があったかを明らかにする。そして、今後も開催される芸術祭と地域住民の関係性について課題を抽出する。

(2) 日時：2015年11月4日(水)/2015年12月16日(水)/2016年1月28日(木)

(3) 場所：直島町役場、宮浦港、ベネッセハウス周辺

(4) 対象：島で出会った地域住民の男女13名

(30代女性1人、60代女性3人、70代女性4人、60代男性2人、70代男性3名)

(5) 主な項目と内容：

①直島に作品が設置されるようになって生活や島の自然環境にどのような影響があったか

- ・観光客増加に伴い、ゴミの排出量が増加した
- ・「環境の島」清掃活動が活発になった
- ・治安が悪化した 家のカギを絶対閉めるようになった
- ・外国人観光客が大きな声で騒いでいる、騒音がうるさい(宮浦エリア 木村さん 60代女性)
- ・経済効果、知名度アップした テレビや雑誌などで取り上げられるほどすごいと思う
- ・道にゴミひとつも落ちていないきれいに保つ努力をしている
- ・トイレボランティア、観光客にトイレを貸すこともある
- ・日常に刺激ができた⇔普通の生活がしたいと思う
- ・住民の生活が最重視されるべきだ(70代 女性)
- ・繁盛期、フェリーやバスに乗れない住民が出てしまう
- ・交通環境悪化(特に自転車のマナー)
- ・交通(フェリー・バス)の便の増加で便利になった
- ・インフラの整備⇒生活が豊かになったのは嬉しい

②アートの島へと変わっていった直島への魅力や愛着の感じ方に変化について

- ・島への愛着、誇りが強まった(宮浦エリア 満福さん 70代)
- ・地元の小学校ではアートの紹介をする授業を取り入れる、子どもの社会性を育む教育が大切という考え(30代 女性)
- ・生まれてからずっと直島で育った、これからも直島で暮らしたい
- ・アートばかりを前面に押ししているが、直島には良いところがたくさんある

③今後あなたは観光業にどのように関わっていきたいか？

- ・もう歳だから参加しようと思わない
- ・観光客の増加を喜び、歓迎するムードがある
- ・外国人観光客への案内のため英語を勉強するなど、新たな趣味や生きがいを見つけている人も多い(70代 男性)

④このまま直島が観光地としてあり続けることについてどのように考えるか？

- 若者・移住者大歓迎、制度も整えている
- 世界に直島の魅力を伝えよう、大掛かりなことになった観光に力を入れるより他に住民のためにしてほしいことがある(70代 女性)
- アートだけでなく直島の文化も知ってもらいたい
- アートの良さが分からない(本村エリア 60代 男性)
- 観光客の多さに疑問・いつまで続くの？
- なぜこんな島に大勢の人が集まるのか謎(逆に質問された)
- 観光産業に関わっていない住民多い(強制はしていない)
- 観光業・新しい仕事に就く
- 来訪者とのふれあいは楽しい(70代 女性)
- 数年後、数十年後の直島の将来が不安、直島は変わりすぎてしまった